

日本学生自転車競技連盟

第17回 欧州遠征事業 (平成27年度 2015年)

報 告 書

JAPAN SPORTS PROJECT

山宮 正 (Tadashi SANGU)

はじめに

東京オリンピックの開催が決定し、国内ではスポーツ界全体が活性化している事と察します。1996年のアトランタ・オリンピック以降、プロフェッショナルの参加が可能となりましたが、それ以前までのオリンピック日本代表選手の多くは、大学生だった様に記憶しております。

日本のスポーツ界は、中・高・大学の部活が中心となって選手が育成される構造ですが、これは世界では実に珍しい形態です。海外の国々では、スポーツは地域の民間あるいは公営のクラブが選手の指導・育成を行うのが普通で、学校はあくまで学問の場として存在しているからです。ごく僅かな例として挙げられるのが米国の野球、バスケットボール、アメフト、英国の漕艇、ラグビーなどでしょう。しかし、諸外国においても大学生でありながら国際競技において良い成績を出している優秀なスポーツ選手は多数存在します。

ベルギーの自転車ロードレース選手 **Jelle Vanendert** (イエーレ・ファネンデルト) は、2011年のツール・ド・フランスの山岳ステージで1勝し、山岳リーダージャージ(赤玉ジャージ)を着ていますが、彼はこの時、大学の経済学部にも籍を残していました。自転車のプロ選手になってからも学校を辞めずに時間の取れる時に少しずつ単位を取得し、教職課程を修了しております。

女子選手では英国の **Emma Jane Pooley** (エマ・ジェーン・プーリー)。2010年の世界選個人TTチャンピオンも大学生として選手活動を続け、2012年には民法学の名誉博士号を取得しました。

自転車競技以外のスポーツで注目に値するのは、現在も活躍中の体操選手オランダの **Epke Jan Zonderland** (エプケ ヤン・ゾンデルランド)。2012年ロンドン・オリンピックの鉄棒で金メダルを獲得。2013、14年の世界選でも同種目で2連勝。彼は医学部の学生でありながら世界の第一線で活躍し、大学も卒業しております。同じくオランダの女子柔道選手で4回のオリンピック出場経験のある **Jessica Gall** (イエシカ・ハル) も医学を学びながら世界のトップで戦い続け、引退後の現在はスポーツドクターの開業医になっています。

近年、日本の自転車ロードレース選手の中には、「大学に行くのは時間の無駄」あるいは「仕事をしていては十分なレース活動が出来ない」などと言って進学せず、そして仕事もせずに実業団チームに所属して自転車活動のみに明け暮れている若者を多く見掛けます。「人生、人それぞれ」ですので、それも一つの生き方でしょう。しかし、十代後半から30歳前後に掛けての期間は、知識・技術の習得能力が最も高い年齢です。この年代に学問や手に職を付ける様な勉強、あるいは仕事のキャリアを何も積まないのは実に勿体無いと思います。

スポーツ選手として活動出来るの期間(年数)には限りがあります。いつケガや病気で活動が出来なくなるかも知れません。自転車ロードレースのプロフェッショナル組織は、現在の日本には存在せず、コンチネンタルチーム(アマチュアスポンサーチーム)の選手達が自称プロを名乗っているのが現状です。その様な環境の中で、大学で勉強をしながら、しかも大学内の部活でスポーツ活動を続けられる日本の若者は「文武両道」を実践出来る恵まれた環境にあるのですから、その特典を活かして、世界のトップを目指して大いに頑張りたいと思います。

2015年 9月 吉日

山宮 正

JAPAN SPORTS PROJECT

2015年 学連欧州遠征事業 日程表

9月 2日(水) 日本発、当地到着

3日(木) 午前:ミーティング 午後:トレーニング

4日(金) 午前:トレーニング 午後:休息

5日(土) ベルギー・Zuttendaal 115km ロードレース 15:15 スタート

6日(日) オランダ・Abbenbroek クリテリウムレース 90km 15:30 スタート

7日(月) 午前:休養 午後:トレーニング

8日(火) ベルギー・Bassevelde 118km ロードレース 16:00 スタート

9日(水) 午前:休養 午後:トレーニング

10日(木) オランダ・Roosendaal クリテリウムレース 80km 16:45 スタート

11日(金) 午前:休息 午後:トレーニング

12日(土) 午前:トレーニング 午後:休息

13日(日) オランダ・Hank クリテリウムレース 90km 15:30 スタート

14日(月) ベルギー・Nieuwkerken Waas 90km ロードレース 15:00 スタート

15日(火) ショッピング & 観光

16日(水) 当地出発

18日(木) 日本帰国

注： 出場予定のレースは、予告なく変更される事があります。

レース活動状況報告

1、Zutendaal



大会名：特になし

開催日：2015年9月5日（土）

開催場所：ベルギー・スッテンダール

参加者：選手3名

金子 智哉（早稲田大学3年生）

岩田 宗也（早稲田大学2年生）

関谷 聡（立教大学2年生）

天候：天候：雨時々曇り 気温：16度

レースの状況：115km（約6.76km X 17周）ロードレース

出走者数：71名 完走者数：34名

結果：岩田選手：1周目に3名のトップグループに加わりましたが、集団に吸収された後、3周目に単独で脱落。4周終了の時点で降ろされました。 DNF

関谷選手：3周目に単独で集団から離脱。 4周目の終了時点で降ろされました。
DNF

金子選手：レース中盤まではメイン集団の中央よりやや前方の良い位置を走っていましたが、残り5周でスピードが上がった時点で集団から単独離脱。
残り3周の時点で降ろされました。 DNF

今年度「欧州遠征事業」の初戦は、あいにくの雨天でした。しかし、コースは特に難しいコーナーや悪路も無く、若干の起伏がある日本人向きのコースでした。

岩田選手はスタート直後から積極的に前方を走り、逃げのグループに加わりましたが、その中で先頭を引かされ、無駄に脚を使ってしまった様子です。

関谷選手は、スピードとその反復力の無さを実感し、これまでの日本での練習の方法を考え直さなくてはならないと初戦で痛感させられました。

金子選手は3名の中では一番長く走りましたが、それはスピードがあるからではなく、集団の中を走るレース感覚、センスに長けているからだと思います。後半に入って集団が本気で走り始めたら、スピードに付いて行けず、脱落してしまいました。

3名共、日本でのレースとは全く違う世界を感じ取れた初戦でした。

Zutendaal レース写真



スタート直後の関谷選手

最初のアタックに加わって積極的な走りを見せた岩田選手
しかし、脚を使いすぎてしまいました。



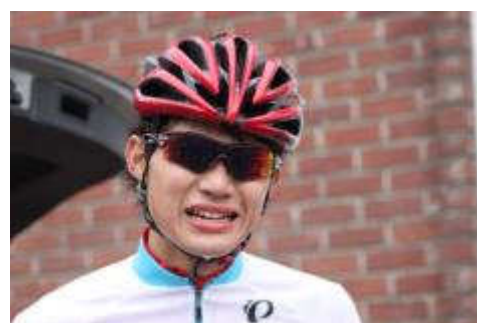
レース前半、集団の流れに巧く乗った金子選手



集団から離脱後も力走する関谷選手（写真左）

同じく岩田選手（写真下）

日本のレースとのレベル差を痛感させられました。



金子選手も集団のスピードが上がると徐々に後退して、離脱してしまいました。

2、Abbenbroek



大会名：特になし

開催日：2015年9月6日（日）

開催場所：オランダ・アッペンブルック

参加者：選手3名

金子 智哉（早稲田大学3年生）

岩田 宗也（早稲田大学2年生）

関谷 聡（立教大学2年生）

天候：曇り時々晴れ 気温：16度

レースの状況：周長約4km X 26周 約104km ロードレース

出走者数：80名 着順が付いた人数：64名

<結果>

岩田選手：2周目にメイン集団から離脱。少人数のグループで追走しましたが、そのグループからも離脱し、4周で降ろされました。 DNF

関谷選手：2周目にメイン集団から離脱。同じ様に離脱した選手達と18名のグループを形成して周回を重ねましたが、残り9周で先頭グループにラップされて降ろされました。しかし、その時点での着順が記録され56位でした。

金子選手：他の2名と同様に2周目にメイン集団から離脱し、単独になりましたが、後続のグループ（関谷選手を含む）を待って合流して走り続けましたが、残り9周で降ろされ、着順は58位でした。

Abbenbroek のレースは、良好なアスファルト舗装で道幅も広く、難しいコーナーが無いので、毎年高速レースになっています。例年のパターンでは、後半まで大集団で展開し、徐々にスピードが速くなり、力の無い選手が離脱して行くのですが、今年は風が強かったので、序盤から集団はバラバラになり、実力差がはっきりと分かるレースとなりました。レースは2周目に20名のトップ集団、26名の第2グループ、9名の第3グループが形成された時点で力の無い選手は後方に取り残されました。

風の吹き抜ける平坦地のレースを経験していない日本選手3名は、あっけなく戦列から離脱してしまいましたが、金子、関谷両選手は、同様に離脱した選手達と共にグループを構成し、ある程度一定

したペースで走り続ける事が出来ました。しかし、トップグループとのスピード差は歴然としていて、残り9周でラップされてしまい、降ろされてしまいました。

3名は、昨日のベルギーのレース以上に本場のロードレースと日本のレースとの格差を感じました。それは単にレベルの違いというのではなく、「全く別のスポーツだった」と言える位、衝撃的だった様子です。

Abbenbroek レース写真



2周目にメイン集団から離脱し、小グループで追走する関谷選手

同じく2周目にメイン集団から離脱した岩田選手。さらに後方の最終グループになってしまいました。





金子選手も 2 周目にメイン集団から離脱し、その後しばらくは単独で追走していたので、後方グループ（関谷選手を含む）に加わる様に指示を与えました。（単独では到底追いつけないので）

18 名の後続グループが一定ペースになってからは関谷、金子両選手もグループ内で安定した走りが出来ました。



岩田選手は最終グループからも離脱してしまい、4 周が終了した時点で降ろされてしまいました。

3、Basseveld



大会名：特になし

開催日：2015年9月8日（火）

開催場所：ベルギー・バッセフェルド

参加者：選手3名

金子 智哉（早稲田大学3年生）

岩田 宗也（早稲田大学2年生）

関谷 聡（立教大学2年生）

天候：曇り時々晴れ 気温20度

レースの状況：周長約7.4km X 16周 約118km ロードレース

出走者数：54名 着順が付いた人数：46名

<結果>

金子選手：6周目に単独で落車。救急車でスタート&ゴール地点まで戻って、救護隊の救急処置を受けました。DNF

岩田選手：7周目に単独でメイン集団から離脱。8周目に入る所で降ろされました。DNF

関谷選手：序盤からメイン集団の良い位置を走り、後半まで粘りましたが、12周目に集団から離脱。残り3周で降ろされましたが、その時点での着順44位が記録されました。

Basseveld は、ゴールまでの直線約300mが本格的な石畳舗装で、ベルギー独特のレースと言えます。レース前に3名には「石畳は躊躇せずに思い切り前で走る」とアドバイスを与えました。それに従って3名共、序盤戦はかなり良い位置を走っておりました。

2名のトップグループとそれを追走する数名の追走グループ、そしてメイン集団という形で前半は周回を重ねましたが、5周目に金子選手が単独で落車。頭部を強打したため、一時は意識を失った状態になりました。(気絶していた) 救急車の中で目覚めましたが、落車の瞬間から救急車の中で意識が戻るまでの記憶が欠落している様子でした。

レースは6周目に10名のトップグループが形成される際にスピードが上がり、岩田選手は集団の後方に後退し、そのまま離脱してしまいました。

関谷選手は、メイン集団で積極的に先頭を引く攻めの走りに徹し、しぶとくレース後半までメイン集団に残ることが出来ました。しかし、集団内でかなり無駄脚を使わされたため、残り3周で力尽きて降ろされてしまいました。44位の着順が付きました。

Basseveld レース写真



スタート&ゴール地点の石畳路を走る集団

レース序盤は、まだスピードがあがって
いなかったため、石畳の悪路でも 3 名は集団の
前方を走ることが出来ました。





6周目に落車して頭部を強く打ち、脳震盪のため一時期意識を失っていた金子選手。救急車でスタート&ゴール地点の救護所に搬送されました。

翌9日、当地の医療機関で検査を受け、右鎖骨骨折と診断されたため、残りの滞在期間中は、レース参加はもちろん、自転車には乗れなくなりました。

12周までメイン集団で頑張った関谷選手。集団の先頭を引き過ぎて、後半は脚が無かった様子です。



残り3周で降ろされ、完全完走を逃してしまった関谷選手。悔いの残る結果でした。

4、Roosendaal



大会名：特になし

開催日：2015年10日（木）

開催場所：オランダ・ローゼンダール

参加者：選手2名

岩田 宗也（早稲田大学2年生）

関谷 聡（立教大学2年生）

天候： 晴れ 気温： 20度

レースの状況： 周長約1.4km X 57周 約80km クリテリウムレース

出走者数： 21名 着順が付いた人数： 20名

<結果>

岩田選手： 9周目に集団から単独で離脱。 その後も複数回の周回遅れになりながらもラスト7周で周回遅れの選手達が降ろされるまで真剣に走ったため、20位の着順が付きましました。

関谷選手： 10周目にの後も複数回の周回遅れになりながらもラスト7周で周回遅れの選手達が降ろされるまで真剣に走ったため、19位の着順が付きましました。

Roosendaalのクリテリウムはレンガ舗装の箇所が多く、1.4kmに6コーナーがあるテクニカルコースです。今日は気温20度で湿度も適度にあり、レースを走るには快適な天候でした。しかし、出走者数は僅か21名と少なく、自らリタイアしなければ賞金が支払われるという観客にとってはつまらないレースでした。(30位までに賞金が出されます)

レンガ舗装や鋭角なコーナーでのコーナーリング、そしてコーナー後の立ち上がりのダッシュなど、日本のレースでは経験の出来ないオランダのレース独特のコースゆえ、経験の乏しい日本選手の苦戦は予想通りでした。

近年、オランダのクリテリウムレースは、周回遅れになってもレースを継続させてくれるので、2名にとってはコーナーリングの良い練習になりました。

他のオランダ選手達のダッシュ力とその反復能力を肌身に感じ、良い経験になったと思います。

Roosendaal レース写真



岩田・関谷両選手は、スタート直後から集団の後方になってしまいました。



関谷選手は、コーナーで前の選手にピッタリと付いて走れなかったため、コーナーの出口で出遅れてしまい、その後の直線でも集団に巧く付くことが出来ませんでした。



メイングループから離脱して周回遅れになった選手達と小グループを形成し、走り続ける関谷選手（先頭）と岩田選手（最後尾）

関谷選手、コーナーリングの技術に問題が有ります。



鋭角のコーナー、特に右回り（時計方向）のコーナーは多くの日本人選手が苦手とするところです。写真は岩田選手。

5、Hank



大会名：特になし

開催日：2015年13日（日）

開催場所：オランダ・ハンク

参加者：選手2名

岩田 宗也（早稲田大学2年生）

関谷 聡（立教大学2年生）

天候：曇り 気温：21度

レースの状況：90km 周長1.7km X 51周 クリテリウムレース

出走者数：23名 着順が付いた人数：20名

岩田選手：スタート12分後に集団から離脱。同じ様に離脱した選手と追走しましたが、グループからも千切れたり、グループへの復帰（周回遅れ）を繰り返しながらラスト数周で降ろされました。着順は16位が記録されました。

関谷選手：岩田選手と同様にスタート12分後に集団から離脱し、小グループで走行を続け、ラスト数周で降ろされた時点での順位14位が記録されました。

今日はオランダでは4都市において「エリート&U23」のレースが開催されていて、その内の1レースは重要なクラシックレースだったため、Hankのレースは出走者数が僅か23名のレースになっていました。

Hankのコースは、アスファルト舗装とレンガ舗装が半々、スタートとしてまず180度旋回するカーブがあり、その直後に鋭角なコーナーが連続しているテクニカルコースで、ここ以外にもコーナーが1.7kmの間に6か所もある典型的なオランダのクリテリウムです。短い距離の間にコーナーが連続するレースは、日本選手2名は経験が無く、スタート前から苦戦が予想されました。

オランダのクリテリウムの多くは最初の15分間が非常に速く、この最初の15分をいかにして離脱せず走るかが重要になります。テクニカルコースに不慣れな2名はこの15分を乗り切れずに離脱してしまいました。

しかし、2名共後半に入ってからにはコーナーリングの感覚を掴んできた様子で、離脱した選手達によって構成された最終グループと共に徐々に巧く走れる様になっていました。

今日はコーナーリングの良い練習になったと思います。

Hank レース写真



スタート直後の 180 度旋回する下り坂コーナー

レースは前半で集団が分離し、複数の小グループが構成されました。
写真 2 番手が岩田選手。 グループから少し離れて最後尾が関谷選手。



今日も 2 名は、連続する鋭角なコーナーで苦戦を強いられました。



レース後半になって少しずつコーナリングの感覚が掴めてきた関谷選手。 良い練習になりました。

複数回の周回遅れになりながらも小グループに戻って走り続けた岩田選手。 関谷選手同様、コーナリング、グループ走行の良い練習になりました。



コーナー出口での立ち上がりのダッシュ力の不足も 2 選手共通の課題です。 写真は岩田選手。

6、Nieuwkerken Waas



大会名：特になし

開催日：2015年14日（月）

開催場所：ベルギー・ニューケルケンワース

参加者：選手2名

岩田 宗也（早稲田大学2年生）

関谷 聡（立教大学2年生）

天候：曇り時々雨時々晴れ、一時激しい雷雨

気温：21度

レースの状況：約90km 約6km X 15周 ロードレース

出走者数：41名 着順が付いた人数：27名

<結果>

岩田選手：5周目に雨が激しくなった際に4つに分離した集団の最終グループで粘り、8周目が終了した時点で降ろされましたが25位の着順が付きました。

関谷選手：5周目に集団が分離した際に単独で離脱してしまい6周が終了したゴール地点通過で降ろされました。 DNF

今日は雨が振ったり止んだり、そして時折晴れたかと思うと突然激しい雷雨になったりと急変する天気でした。コースには一箇所石畳舗装が有りましたが、その脇には細いコンクリート舗装の部分があって、そこで集団は毎周回一列状態になりました。この箇所で集団の前の方に居ないと力の無い選手達の「中切れ」の犠牲になってしまいます。

関谷選手は、集団前方の良い位置を走っていましたが雨が激しくなって以降、コーナーリングで巧くグループに付けなくなってしまい、後方に下がってしまったため、離脱してしまいました。

岩田選手は、何とか最終グループに残り、少人数で追走して頑張りました。しかし、トップグループとの距離が開いたため、レースが半分以上終了した時点で降ろされましたが、24位で賞金を獲得しました。(30位まで賞金)

Nieuwkerken Waas レース写真



スタート直後の岩田選手（写真左）
同じく関谷選手（写真下）



レース序盤は集団の良い位置を走っていた関谷選手。



雨が降り始め、レインジャケットを着用する選手もいました。
写真、先頭の選手がレインジャケットを取り出している所。

雨が激しくなると共に集団の後方にさがってしまった関谷選手。



岩田選手は最終グループに残って頑張りましたが、8周目で降ろされました。後続の自動車は、レースの最後尾を走る車両です。

まとめ

1、準備段階・機材など

今年度の「欧州遠視事業」は、日本国内の事務担当者の交代があり、その引継ぎが巧く出来ていなかった様子で、選手への情報提供が不十分でした。一番大きな問題は、本来ならば選手を選考した時点で署名・捺印を取っていないと「参加者同意・承諾書」を選手が提出しないまま当地に来てしまった点です。また、「海外旅行保険」についても選手達に説明が無く、曖昧な状態でした。この2点は当地で事故が発生した場合に極めて重要となるものですので、慎重かつ丁寧に事務処理を行って頂きたい次第です。

選手個人個人にも準備不足が何点かありました。まず、金子選手と関谷選手は、11段スピードを使用しているにも拘らず、スペアの後輪を持参して来ませんでした。選手に事前に配布されている「遠征の注意事項」には、11段スピードの場合は後輪のみスペアを1本持参する様に記載されています。学連では2007年にスペアホイールを2ペア用意し、当方で保管しております。この時はちょうど9段から10段に移行する過渡期であったため、9段、10段の両方に使用可能なシマノDA9段スピード用ハブで車輪を組みました。現在は10段から11段に変わり始めているので、10段、11段使用者は半々の状態でしょうか。いずれにせよ、11段は用意されていないので、持参しなければならないのです。クリテリウムレースではパンクした場合にピットボックスに置いたスペアに交換が可能です。また落車で破損したり、レース直前にパンクなど思わぬアクシデントが発生した際にスペアの車輪は不可欠です。金子選手は持参しなかった理由を「持っていないから」などと言いつけておりますが、「持っていないならば購入するか、他の部員から借りてでも用意しろ！」なのです。

次に関谷選手のボトルケージ（プラスチック製）がボトルを押さえる強度が不足していて、悪路のレースでシートチューブ、ダウンチューブの両方のボトルを落としていました。日本で普通に使われているボトルケージの殆どが強度不足で使いものにならない事は、過去において何回も報告書に書いております。この点、未だに日本の選手達の認識が甘いと思います。



ボトルを支える強度の調整が可能で最も信頼出来るケージは、やはり従来から広く使用されているこのオーソドックスな形状のケージです。但し、同じ形状でも日本製（国内メーカー）のケージの殆どは、パイプの太さ、その接合部分の強度が不足していてケージそのものが破損してしまうので、欧州のレースでは使い物にならないので要注意です。

写真は関谷選手が当地において購入し、付け替えたケージと同じ製品。

今回派遣された3名の中で「注意書」をよく読んで、かなり細かい点まで慎重に準備していたのは岩田選手（早稲田大学2年）です。彼はフレームのリア変速機取り付けのための「ディレラー・ハンガー」の予備も持参していました。近年、フレーム素材がカーボンあるいはアルミニウムが主流となり、リアエンドの変速機取り付け部分の素材も変わり、ネジで着脱可能式になっています。その部分「ディレラー・ホルダー」は、フレーム本体に損傷を与えないために、意図的に折れやすくなっています。今回、金子選手が落車した時もこのホルダーが折れています。折れないまでも飛行機の輪行などで微妙に曲がってしまい、変速が巧く出来なくなるというトラブルは頻繁に発生しています。クロモリのスチールフレームの時代は、専用工具で修正が可能でしたが、現在のホルダーは曲がった角度を修正しようとしても折れてしまう可能性が高いので、一旦曲がったら交換するしか方法は無いのです。金子選手が使用しているフレームは、インターネット通販のみで販売されている特殊な製品で、当地の自転車店では交換用のホルダーの購入は不可能です。こういう特殊なフレームならば尚更にスペアのホルダーを遠征では必ず持参するべきでしょう。この件は、既に10年位前になりますが「欧州遠征事業」の報告書において、私は書いております。岩田選手はそれを読んでいた訳ではありませんでしたが、スペアのホルダーを持って来ていたので、自転車に関して日頃から良く調べているな、と感じました。



写真（左）は、リアエンドにネジ留めする「ディレラー・ホルダー」メーカー、モデルによって、それぞれ形状がことなるので厄介です。

第3戦 ベルギー・Basseveld で落車し、エンドの「ディレラー・ホルダー」が折れた金子選手の自転車。金子選手はこの落車で鎖骨を骨折したため、以後の活動は出来なくなりましたが、もしもケガが軽症であったとしても自転車店では販売されていないフレームだったので、この自転車は使用不可能になっていたでしょう。



* 破傷風予防接種の奨め

これも以前に「欧州遠征事業」報告書で書いておりますが、自転車選手は「破傷風の予防接種」を受ける事を推奨致します。過去において当方が指導した選手が落車事故で病院に行った際に必ず摂取の有無を聞かれ、受けていないとその場（当地の病院）で注射を打たれています。

今回、事前に予防注射を推奨する文面を学連事務局を通じて選手達に配布致しました。岩田選手はその文面に従って日本国内で予防接種を受けて来ました。関谷選手は過去に受けた経験があったので、医師にそれがまだ有効かどうかの確認を行っていました。金子選手のみ奨励を無視していたのですが、その選手が落車して病院送りになり、病院で注射を打たれました。

懸念されるのは、軽い擦過傷程度で病院などの医療機関での治療を受けなかった場合です。破傷風はかなり小さな傷口からでも感染する恐ろしい病気です。発症してからでは手遅れとなります。海外でこのような危険な病気になると非常に厄介ですので、是非事前に接種を受ける様に選手に奨めて頂きたいと思います。日本国内のみの活動でも破傷風感染の危険性は同様です。

2、日常生活、食事、その他

今回派遣された3名は、年齢が皆一緒だったため、学年、学校は違ってもとても仲良く、楽しそうに当地での生活を送っておりました。食事に関しては、外食は日本よりもかなり高いので、到着日と最終日を除いて完全に自炊に徹していました。当番制で毎日交代で用意していた様子です。事前に当地では自炊生活が中心になると知らされていたので、日本から多少の調味料などを持参しておりました。

自転車選手にとって重要となるのは、レースに合わせた時間に適した食事を摂れるかどうか、です。この点、宿泊のホテルではアパートタイプの部屋を利用して、キッチン用品も全て揃っているので、自分達で時間を考えて準備が可能です。また、近くにあるスーパーマーケットで大抵の食材は入手可能で、自分達の好みの食材を使って調理が出来るので、自炊を面倒と思わなければ、むしろ食事付の待遇よりも生活はしやすいはずです。

ただ今回の3名には共通してレースに行く準備が不十分という問題が目立ちました。まず、レースに持って行く食糧（レース前の食事）やレースで携帯する飲料（スポーツドリンク）をホテルで用意せず、丸ごと大きなビニール袋に入れて全てを現地に持って行き、現地で用意するというやり方です。食パン一斤丸ごとを持って行くなど必要ないし、スポーツドリンクなど事前に作ってボトルに入っているべきなのです。（レース会場までの距離は、殆ど1時間以内なので）レーススタート前には何が起こるか分かりません。途中の道が渋滞していて、時間ギリギリに到着など不測の事態も考慮してはならないのです。ホテルで出来る事を先送りにして、現地でやろうなどという考え方そのものが間違っています。

また、食糧以外の荷物のまとめ方もバラバラの状態でしたが、注意を与えて以降、後半は相当に改善されました。

3、各選手の問題点と今後の課題

昨年の報告書に私は次の様に記載しております。

“彼等の共通した問題は、自転車競技の基本となる3大要素 ①瞬間的なスピード ②そのスピードの持続力と反復能力 ③集団走行の技術 が身に付いていない点です。

その原因として考えられるのは、まず多くの大学自転車部の練習方法がロード中心で、しかもその内容が単調な「高速サイクリング」になっているためではと？考えられます。”

今回の3名にも全く同じ内容が当てはまります。選手3名もそれを実感しておりました。

始めて欧州の「本当の自転車レース」を走り、日本との違いの大きさを知りました。それはまさに

「自転車を使った自転車レースに似たスポーツを自分達はやっていた」と言う位の驚きでした。

そして3名揃って「今回ここに来れたおかげで、本当の自転車レースが何であるかを知ることが出来た」と語っています。TVでも欧州のプロレースが放映される様になり、インターネットの発達によって日本にも情報は多く入っているのですが、実際に経験するとの見聞きするのとでは全く世界が違うのです。

* **金子 智哉 選手 (早稲田大学3年生)**

まず金子選手は、物事を始める際の準備のやり方、考え方に大きな問題があります。現在出来る事を先送りにしてしまうし、やるべき事の優先順位を考え、計画的に行動を取る姿勢が欠如しています。海外遠征はとても貴重な機会、それも自己負担金を相当額支払っているのだから少しでも有効に無駄の無い活動にするにはどうすれば良いか、そういう観点から少しは真剣に準備をして欲しいと思われました。機材に関しては、前述の様にスペアの後輪を持参して来なかったし、既に寿命に達している古いタイヤを装着していました。交換用に新しいタイヤは持参しておりましたが、ならば何故日本を出発する前に新品に替えておかないのか？そして、なぜ古いタイヤで貴重なレースに出場するのか？実は金子選手は、第1戦のベルギー **Zutendaal** のレースで単独で千切れてスタート&ゴール地点に戻って来る途中でタイヤがパンクしています。仮に離脱しなかったとしてもパンクでリタイアだったでしょう。(パンクの原因はタイヤが古かったからかも知れません)

またレース直前にリア変速機の調整をしていたのでどうしたのか尋ねたところ「昨日から調子が悪いので・・・」と。ならば何故昨日の内に完全な状態に直しておかないのか？スタート直前になってやることではありません。同じスタート直前の変速機いじりを2日続けてやっていました。

落車した第3戦の **Basseveld** では、ホテル出発直前にブレーキシューを交換し(これもどうして日本を出発する前に交換して来なかったのか?)、ブレーキレバーの引きが硬いままになっていました。

交換後の調整、試し乗りなど一切考えに無い様子です。

遠征の初日に日本から持参した状態の自転車を点検した時も岩田・関谷両選手の自転車は「注意事項」の指示通りにピカピカに洗車されていましたが、金子選手の自転車は、細かい部分に汚れが残っているのが直ぐに目に付く状態でした。

その他、ホテルで準備しておくべきスポーツドリンクなどもレース直前に作ろうとするし、兎に角も計画性が無く、だらしの無さが随所に目立ちました。事前出来る事を先送りにせずに、計画性を

持った行動が出来ない様では社会人になってから大変な苦勞をする事になるでしょう。

レースの走り方に関しては、第1戦を見る限りですが、3名の中ではレースを走るセンスが一番優れていると思いました。3名の中で一番長く集団に付いて走れたのは、スピードや瞬発力が勝っていたからでは無く、集団の流れに乗るのが上手かったと考えられます。

スピードと瞬発力に関しては、第2戦オランダ **Abbenbroek** のレースで力不足が露見しています。残念でならないのは、落車による鎖骨骨折で第4戦、5戦のオランダの本格的なクリテリウムを走れなかった事です。オランダではクリテリウムの走り方でその選手のロードレースを走る基礎能力を判断します。クリテリウムによって、現時点における金子選手の基礎的な能力がある程度は判断可能なので、1レースでもクリテリウムを走る所を見たかったと思います。

* 岩田 宗也 選手 (早稲田大学2年生)

岩田選手は今回派遣の3名の中では一番準備がしっかりと出来ていました。また、ミーティングおよび日常の会話でも最も質問が多く、その中には的を射った良い内容のものがああり、向学心も一番強く感じさせられました。前述したフレームの「リアディレーラー・ホルダー」の予備を持参するなど、遠征で必要になるものを自分自身でも相当考えて準備した姿勢が窺えます。

レースでは第1戦 **Zutendaal** でいきなり最初のアタックに加わるなど積極的な走りをしていましたが、現時点での技量を上回ってしまいました。岩田選手に不足しているのは日本の選手の多くに共通している「瞬発力、スピードの持続性と反復性の不足」です。岩田選手は高校時代も自転車部所属なので「本場のハイスピードのレースを走って、もしかすると高校時代の方がスピードがあったのではないか、と感じないか？」と尋ねたところ「その通りだと思います」との返答が返って来ました。

これは岩田選手のみでなく、高校も自転車部に所属していた選手達に共通した現象です。大学に入ってから何が変わっているのか？それはトラックで練習する機会が殆ど無くなっているのです。

高校の自転車部の多くが練習はトラックが中心で、それも1000mTTで良いタイムを出すためのトレーニングに力を入れています。1000mTTの走行能力がいかにロードレースに重要であるか、そして1000mTTのタイムでロード選手としての素質が判断出来るという話を私はこの学連の「欧州遠征事業」の第1回目の報告書(1999年)から何度も書いております。

大学に入ってからロード選手はロード練習のみ、それも単調な内容で、レースのためのトレーニングと言うよりも高速サイクリングを仲間達と楽しんでいる様な走りになっているのです。

今回の遠征期間中に岩田選手は私との会話の中から日本に戻ってから何をすべきかを色々と学んでくれたと思います。それを十分にトレーニングに活用して欲しいと思います。



あと岩田選手は、オランダ **Roosendaal** のクリテリウムレースでコーナー内で後方を確認する走りを何回かしていましたが、鋭角なコーナー内ではバランスを崩す可能性があるため、要注意です。

* 関谷 聡 選手 (立教大学2年生)

今回初めて立教大の選手が派遣されました。 伝統の6大学、過去には優秀な選手を多数輩出している名門校。 私が大学生だった70年代後半～80年代初頭にもインカレで上位に入る選手が複数存在しておりました。 近年はあまり目立たない様子ですが、部員数は選手はあまり多くなく、女子マネージャーが増えているそうです。

関谷選手も金子選手と同様に11段スピードを使用しているのも拘わらず、後輪スペアーを持参して来ませんでした。 これ以外の準備は比較的良く出来ていました。 自炊のために日本から若干の調味料などを持参するなど、日常生活に関しても結構考えていたのだと思います。

しかし、関谷選手もやはり金子選手と同様に今出来る事、やらなくてはならない事を先送りにする傾向があります。 例えば、ボトルを2つとも落としてしまった翌日、近くの自転車店で頑丈なボトルを購入したのは良いのですが直ぐに交換せず、その日の練習には不都合のあったままの状態でした。 交換する時間はあったのだから、練習で再びボトルを落とす前に替えなくてはならないはずで

す。 また、今回の3名に共通した問題ですが、レースに行く際の荷物のまとめ方などにも工夫が必要です。 日常の行動には、所属している自転車部に現在は体育会の部活の雰囲気が無くなっているのでは？と思わされるものが頻繁に見受けられました。 これは早稲田大の2名にも共通したものを感じました。

レースの走り方に関しては、他の2名、そして多くの日本人選手と同様に「瞬発力、スピードの持続性と反復性の不足」がまず一番の問題ですが、関谷選手の場合、コーナーリングの技術が未熟である様に見受けられました。 前の選手とどうしても距離を開けてしまうのです。 本人もこの点を自覚しており、何とかして技術を習得しようとオランダのクリテリウムレースでは周回遅れになりながらも必死に走りました。 関谷選手も本場のレースを走って、本当の自転車レースを経験出来ました。 この貴重な経験を大学の部活に持ち帰って活用して欲しいものです。



コーナーリングの技術習得が関谷選手の今後の課題の一つです。

あとがき

近年、大学生が体育会の部活を敬遠する傾向にあるという内容の記事を新聞で見掛けました。大学によっては、部活登録者の減少に歯止めが掛からない競技もあるそうです。

しかしながら、就職活動において体育会の部活出身者は圧倒的に有利という世相は依然として変わっていない様子です。その理由に関してですが、「体育会（スポーツ）の部活は、試合に勝つ事を最大の目標として、その目標をいかに達成するかを追求してきた人材だから」だそうです。さらに先輩、後輩の上下関係が厳しく、行動が機敏、挨拶がはっきりと出来るなども大きな要素でしょう。

学連の「欧州遠征事業」は今年度で17回目を迎えました。過去を振り返って、これまで派遣されて来た学生達と比較すると今回派遣された3名は揃って体育会の学生らしくありませんでした。試合に行く際の準備など、勝負するための工夫、追求が足りませんし、日頃の態度、挨拶の仕方などは、だらしなさが目立ちました。試合当日、荷物を自動車に積み込む作業でも、次に何をするのかを分かっているにも拘らず、指示しなければ何もせずにボケーと立っているだけ。機転の利く行動が出来ていませんでした。彼等よりもバイトで社会人の中で働いている一般学生の方が遥かに使い物になりそうだと感じました。

滞在期間中、最後のミーティングにおいてこの問題を提議しました。3名の中で最も準備がしっかりしていて、向学心も強く感じられた岩田選手は、おそらく高校時代に厳しい指導を受けていたであろうと思い、「高校時代はもっと部活は厳しかったのでは？」と質問したところ、「高校時代は顧問の先生が居たので厳しかったけれど大学には（厳しい指導をする人が）誰も居ない」との返答でした。

大学の部活において、指導する立場は先輩です。先輩が厳しく後輩を指導し、それが伝統的に受け継がれて行くのが本来の体育会の姿だったはずです。ところが近年の大学の体育会では、形式的に後輩が敬語を使って先輩と話をしているだけで、先輩と後輩が仲の良い友達になってしまっていて、先輩が後輩を厳しく指導する姿が見られなくなっています。

さらに最近では自転車レースを題材とした漫画、アニメの人气が引き金となって、女子マネージャーが増加の傾向にあり、ますます自転車部は体育会よりも一般サークルの「仲良しクラブ」になりつつあるのではないのでしょうか？

昭和の時代の体育会は、1学年の差には天と地の違いがあり、先輩が後輩に対して理不尽な振る舞いをするのが体育会の慣例になったいた大学もありました。それは決して良い事では無く、是正されて当然なのですが、現在の状況は「タガが外れている」状態で、その悪影響は競技そのものに強く反映されると思います。

一部の大学を除いて指導者が日常の活動を監督するのは困難と思いますので、OB 諸兄が現役部員達に叱咤激励する機会が必要なのでは？と考えさせられました。

以上